調査研究報告
ハワイのセルビア人画家パーヴェル・ペトロヴィチ——宮内庁三の丸尚蔵館のペトロヴィチ画『布哇皇帝之像』——Sećanje na Veru Smiljanić（1923-2019）Redovnog Profesora na Filozofskom Fakultetu u Beogradu——

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鐸木, 道剛 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/25074

調査研究報告

ハワイのセルビア人画家 パーヴェル・ペトロヴィチ

―― 宮内庁三の丸尚蔵館のペトロヴィチ画『布哇皇帝之像』――

Sećanje na Veru Smiljanić（1923–2019） Redovnog Professora na Filozofskom Fakultetu u Beogradu

鐸　木　道　剛

1. 序

ビザンティン美術研究の昔からの友人で，現在ベオグラード大学教授，そしてセルビア科学アカデミー会員，ということはセルビアの国家的誇りであるセルビア中世美術の研究の頂点に立つミオドラグ･マルコヴィチ（Miodrag Marković 1962 年生）氏から連絡があった。ハワイに行かないか，である。バカンスではない。ハワイの宮廷画家にセルビア人がいるとのこと。その名はパーヴェル・ペトロヴィチ（Pavel Petrović 1818–87）。その実地調査への誘いである。2019 年 9 月 6 日から 11 日まで。ハワイの宮廷，それもハワイ王朝の最後で最大の名君，マーク・トウェイン（1835–1910）が 1866 年に「教養ある紳士で，静かで，威厳があり，感受性豊かな男で，王にふさわしい」[1] と評していた当時 30 歳のカラカウア王（Kalakaua 1836–91）の後の宮廷の画家である[2]。ハワイと日本は明治初期には近代化を目指す環太平洋の国家として同じ立場にあった。

日本の皇室の宮廷画家としては高橋由一や五姓田義松がまず思い浮かぶが，やはり西洋から招かれた画家たちがいる。明治 9 年に設立された工部省付属美術学校に招聘された，

---

(1) Mark Twain, *Letters from the Sandwich Islands : Written for the Sacramento Union*, San Francisco, 1937, p. 105.

(2) カラカウア王については，荒俣宏（翻訳・解説）・樋口あやこ（共訳）『カラカウア王のニッポン仰天旅行記』小学館，1995 年。これはカラカウア王の 1881 年の世界旅行に同行したアームストロングの記録の抄訳を中心に記したエッセイで，ハワイの近代史の一般向けの入門書になっている。William N. Armstrong, *Around the World with a King*, New York, 1904.　またカラカウア王の全体像をまとめた展覧会のカタログもある。*Ho'oulu Hawai'i : The King Kalakaua Era*, Honolulu Museum of Art, 2018.

いわゆるお雇い外国人の画家フォンタネージであり，彫刻家ラグーザであり，建築のカペレッティであった。それまで神であって，神は不可視，だから肖像画は不可能あるいは，描いても公開しない近代人としての西洋軍服の明治天皇の肖像をコンテ絵で描いたのも，お雇い外国人のエドアルド・キヨッソーネ（Edoardo Chiossone 1833–98）で，写真撮影で，それはあたかも中世の東方教会でのイコン（聖像）のように，写真技師である丸木利陽が機械的（アケイロポイエートス：人の手に依らず）に複製し，つまり写真複製して御真影として配布されたことはよく知られている。

カラカウア王は明治 14 年（1881 年）に日本に来ており，その際，姪のカイウラニ王女（Kaiulani 1875–99）と山階宮定磨王（のちの東伏見宮依仁親王 1867–1922）との婚姻を提案したことも重要な事実である。その後，1885 年の 7 月 24 日に明治天皇に日本駐箚ハワイ大臣（Minister of Hawai'i to Japan）から，パーヴェル・ペトロヴィチが描いたカラカウア王の肖像画が献呈されたことがわかっており[3]，これは宮内庁三の丸尚蔵館に『布哇皇帝之像』との作品名で現存することを，三の丸尚蔵館の研究員の田中純一朗氏に確認した（2021 年 9 月 24 日）。

パーヴェル・ペトロヴィチというセルビア画家はどういう画家であったか。どのような経緯でハワイの宮廷画家となったのか。同じ頃のクロアチアの画家でクロアチアの民族主義の最も重要な画家ヴラホ・ブコヴァツ（Vlaho Bukovac 1855–1922）も初めは船乗りで，アメリカで肖像画家として仕事を始め，その後，ヨーロッパに戻り，フランスでパリの美術学校で学んでいる[4]。以下，セルビア人画家パーヴェル・ペトロヴィチについて，既に出版されているミオドラグ・マルコヴィチ氏による初めての基礎研究モノグラフ[5] から基本的な事実を紹介し，コメントを加えていく。

---

[3]　ハワイのビショップ博物館（Bishop Museum）からミオドラグ・マルコヴィチ氏宛の 2019 年 10 月 29 日付け書簡（30912）による。1975 年 11 月の昭和天皇のハワイ訪問に際して，額に入れたカラー写真複製画（Image ID：SP 59833　法量は 37 × 21 cm）がビショップ博物館にもたらされたことが，マルコヴィチ氏への回答に記されている。そこでの複製写真の記述は次のとおり。Photograph of a portrait of King Kalakaua.　The original portrait was presented to Emperor Meiji of Japan on July 24, 1885 by the Minister of Hawai'i to Japan, Robert Walker Irwin.　The original painting is still in Japan.　This framed color photo of the painting was presented to Bishop Museum during Emperor Hirohito's visit in November 1975.　Photographer unknown.

[4]　クロアチア近代の最大の国民画家であるヴラホ・ブコヴァツは，山本芳翠が描いた近代日本最初のアカデミックな裸婦像との関係で，我が国の近代美術にとって重要である。最近では以下に記した。鐸木道剛「美術―近代クロアチアの国民画家ヴラホ・ブコヴァツ」, 柴宣弘／石田信一（編著）『クロアチアを知るための 60 章』（明石書店，2013 年）所載，251–255 頁。

[5]　Miodrag Marković, *Pavel Petrović –od Temišvara do Havaja, Zaboravljeni srpski slikar*, Beograd, 2015.　書名は『パーヴェル・ペトロヴィチ，テミシュヴァールからハワイへ，忘れられたセルビア人画家』。以下の歴史的事象の記述は，マルコヴィチ氏のこの研究書による。この研究書は，画家ペトロヴィチの書簡や，彼に関する当時の新聞記事など，全ての文書資料と現存する作品を参照しての，現在最も詳しく，また信頼できるモノグラフである。

2.　ティミショアラ（オーストリア・ハンガリー帝国のセルビア人の居住地）時代

パーヴェル・ペトロヴィチは，1818 年にティミショアラ（Timişoara）に誕生した。オーストリア・ハンガリー帝国のバナート地方の町で，現在のルーマニアとセルビアとハンガリーの領土が重なる場所で，ティミショアラとは現在ルーマニア領でルーマニア語の呼称。セルビア語ではテミシュヴァール（Temišvar）である。ハンガリーの作曲家ベラ・バルトーク（Bela Bartok 1881–1945）の生地であるナジ・セントミクローシュ（Nagyszentmiklós, 現ルーマニア語地名 Sânnicolau Mare）にも近い。

誕生日は 6 月 28 日と，本人が後にニューヨークでアメリカに入国する際に記している[(6)]。父サヴァ・ペトロヴィッチは，ティミショアラ近郊のヤズヴィン（Jazvin）の生まれで，1814 年にティミショアラに移住。4 年後に市民権をえて，ファブリカ（Fabrika）と呼ばれるセルビア人の居住地域に住み，妻マリヤ・シベスロフ（Marija Sibeslov）との間に，パーヴェルの他に 2 人の息子が生まれた。父のサヴァ・ペトロヴィチも画家で，様々な分野で活動していた記録があり，三人の息子を市内の学校に入学させた。パヴェルは 1828/1829 年あるいは 1829/1830 年の入学で，入学式記録はラテン語で記録されており，その学校は，おそらくバナート地方全体がハプスブルグ領となってすぐの 1718 年に開設されたティミショアラでもっとも古い学校であったかと思われる。しかし本人によると，「厳しかったので，悪魔が十字架から離れるように，勉強から離れ，頭が多少とも働くうちは，勉強しようかとも思ったが，手遅れだった」と記している。しかし絵を描くことには興味があって，まず父から手ほどきを受けた。絵の才能はあったようで，16 歳の時にウィーンの美術アカデミーの入学試験を受け，1834 年 7 月 29 日に入学し，ウィーン郊外のヴィデン（Vidin, Wienstrasse 794 あるいは 797）に住んだ。それは 1786 年から 1877 年まで美術アカデミーがあった旧聖アンナ修道院から数キロメートルであった。

3.　ウィーン時代

ウィーンの美術アカデミーの最初の年は，版画（エングレーヴィング）のクラスに入り，1834 年 11 月からは，音楽家のフランツ・シューベルトの友人であったレオポルド・クーペルヴィーザー（Leopold Kupelwieser 1796–1862）教授のクラスに入った。ロマン主義のナザレ派の流れをくむ画家である。そこで古代作品の模写を始めた。1835 年 6 月には『年

(6)　以下の記述の事実部分はマルコヴィチ氏の著書に従う。Marković, op. cit., pp. 37ff

老いた負傷兵』を共同展覧会に出品している。しかしまもなくパーヴェル・ペトロヴィチは持ち前の放浪癖を示し始める。1835/36 年の年度の前半の学期はデッサンで最優秀な成績であるのに，年度の終わりにはアカデミーを離れている。それ以降，アカデミーに彼の記録はない。アカデミーを離れた理由はわからないが，パーヴェル・ペトロヴィチは早くも 1836 年にアラド（Arad）でバナート地方のキウルスキ家の二人，エマヌエルとボジャナの肖像画（ベオグラード，国立博物館蔵）【図 1】を描いている。このことはウィーンのアカデミーでの 2 年の学習で，独立した画家として仕事ができたことを示している。ウィーンのビーダーマイヤーの様式で，さらに署名は “Petrovits Paul pinxit 836” とラテン語で入れている。また二人のうち夫を描く絵にしか署名は入れていない。他のバナート地方の夫婦の肖像についても，これは同じである。

セルビア人にとって近代はウィーンである。1689 年のオスマントルコのウィーン攻略からの撤退の後，1690 年のオスマントルコ領からセルビア人のハプスブルグ領内への「大移動（Velika Seoba）」がセルビアの近代の始まりである。バルカン全体にとってもそうであるように，ウィーンは西欧への入り口であった。絵を志す若者にとっても，ウィーンのアカデミーで学ぶことが画家としての第一歩であった。セルビア人でウィーンにビーダーマイヤー様式を学んだ画家としてコンスタンチン・ダニール（Konstantin Danil 1798–1873）が筆頭として挙げられるが，ヨヴァン・イサイロヴィチ・ムラージ（Jovan Isajlović Mladji 1803–85），パーヴェル・シミッチ（Pavel Simic 1818–76），そして女性画家カタリナ・イヴァノヴィチ（Katarina Ivanovic 1811–82）らがいる。パヴェル・ペトロヴィチもその一人であった[(7)]。

パーヴェルは最初から自立を目指し，20 歳になるや結婚して一家を構えた。相手は，モドシュ（Modoš 現在のヤシャ・トミッチ　Jaša Tomić）のティモティ・ポポヴィチの娘のドラギニャで，結婚式は郷里のティミショアラで 1838 年 10 月 23 日に行われ，まもなく妻ドラギニャの故郷モドシュに移り，そこで三人の子供に恵まれた。50 キロ離れたモドシュに移ったのは，パヴェルの仕事とも関係していて，1839 年 7 月にモドシュの教会当局と，聖ニコラ教会のイコノスタスの中央イコンの制作の契約を結んでいる。1839 年から 40 年にかけて制作され，パーヴェルはキリスト，聖母子，洗礼者ヨハネ【図 2】，聖ニコラのイコンを描いた。バナート地方で当時評価の高かった，セルビア人で最高のビー

(7)　小学館の『世界美術大全集』で，セルビアの近代画家について記した際，コンスタンチン・ダニールとパーヴェル・シミッチ，ヨヴァン・イサイロヴィチ・ムラージの作品を挙げておいた。鐸木道剛「東ヨーロッパの新古典主義美術」『世界美術大全集 19 新古典主義と革命期美術』（鈴木杜幾子編，小学館，1993 年）所載，280–284 頁

ダーマイヤーの画家コンスタンティン・ダニール（Konstantin Danil 1798–1873）の作品と比較することができよう。モドシュのイコンのあとは，もっぱら肖像画を描いていた。それはモドシュだけでなく，ティミショアラとアラド（Arad）からキキンダ（Kikinda）やノヴィ・ヴェチェイ（Novi Večej）までのバナート地方の北西部に及んだ。多くの肖像画を描いたが，イコンを描くことをやめたわけではなかった。しかし 1843 年に描いたと思われるヴェリキ・センペトルのセルビア教会のイコノスタスの中央イコンの聖母子を描くだけで，残りはニコラ・アレクシッチ（Nikola Aleksić 1808–73）が完成している。ブガルスキー（Bugarski）は，ペトロヴィチは 1844 年初めに「世界に出て，死ぬまで外国に住むことにした」と記している[8]。確かにワラキア公ゲオルグ・ビベスクの肖像画を制作していて，ブカレストにいたことが確かである。1845 年 7 月 3 日付けのカルカッタよりの手紙があり，インドでは食べ物も飲み物も，「ブカレストの最良の殿のところで」経験したより素晴らしいと書いており，最終的にセルビアを離れる前にワラキアの首都にいたことは確かである。1844 年の年記のあるビベスク公の肖像画はその証左である。当時，ワラキアには肖像画を描くために多くの外国人画家が来訪していた。トランシルヴァニアからはカルロ・サトマリとミクローシュ・バラバーシュ（Miklós Barabás 1810–98），バナートのエレミルからはアントン・フラデク，ペシュトからはアウグスト・シェフト（August Schoefft 1809–88）らである。シェフトはインドとパンジャブで画家として成功しており，ペトロヴィチは彼から話を聞いて，冒険的生活の刺激を受けたと思われる[9]。このような競合の中で，ティミショアラ出身のセルビア人画家ペトロヴィチが，ワラキアの新しい支配者であるビベスク公の肖像画を描く特権を得ていることは注目していい。

ビベスク公は 1844 年 3 月からワラキア国の要職につき，それ以降は肖像画のためにポーズする時間もなかったはずである。3 月 4 日に彼は国の役所を離れて，夏の初めにはワラキア全土を巡る長い旅にでている。目的は主要な町での支配状況と公的機関の働きを調査するためであった。もちろん肖像画は石版画から制作した可能性もある。同じく 1844 年の就任に際して制作された石版画の制作者はヨゼフ・クリーフーベル（Josef Kriehuber 1800–76）。当時のビーダーマイヤー時代のウィーンで最も著名であった肖像石版画の版画家である。ペトロヴィチの手紙からわかることは，その後，しばらく故郷に滞在した後 1844 年 4 月の終わりか，あるいは 5 月の初めに最終的に祖国を離れたことである。

---

[8] Marković, op. cit., p. 40
[9] Marković, op. cit., p. 150

4. インド時代

ロンドンに数ヶ月滞在したのち，インドに向かった。ボンベイとカルカッタ，シムラ（Simla），そしてベンガルに最も長く滞在した。インドからティミショアラへの手紙から肖像画を描いていたことがわかる。カルカッタでは英国人と交友し，その影響で 1845 年 7 月にフリーメーソンに入会した。1846 年の 8 月にはラホールに移動し，英国の中将ジョン・ハンター・リットラー（John Hunter Littler 1783–1856）とシーク国最後の王である若きマハーラージャのドゥリープ・シング（Duleep Singh 1838–93）の肖像画を描いた。1846 年に再びカルカッタにいたが，1847 年夏にヨーロッパに戻り，パリで画家たちと交友し，ティミショアラにもしばらく滞在し，オーストリア帝国のパスポートを更新した。その後，2 年間はロンドンに滞在し，中央ヨーロッパでの革命を観察。1849 年の末か 1850 年に再びインドに出立。ローマ，ナポリ，アレキサンドリア，カイロを経由した。ボンベイに数ヶ月滞在し，9 月初めに香港に移動。冬をそこで過ごしたのち，ロシアの船で，当時ゴールドラッシュに沸いていたカリフォルニアに向かった。

5. アメリカ時代

嵐の中の船旅を終えて，サンフランシスコに到着したのは 1851 年 2 月 8 日。すぐさま肖像画の制作を始めるが，彼のアトリエは 5 月初めに火災にあって，画材と共に多くの肖像画も失われた。それがきっかけであったか，その後，商売に従事し，特にサンフランシスコの自警団の活動で，その設立者のひとりでモルモン教徒で富裕なサミュエル・ブラナン（Samuel Brannan 1819–89）と知り合い，1851 年の 11 月中旬にハワイで政治的転覆を狙うブラナンに同行。それは不首尾に終わり，ホノルルでブラナンと袂を分かち，1852 年の春に南アメリカに出立。ヴァルパライソ（Valparaiso）に滞在，サンティアゴ（Santiago）からコピアポ（Copiapo）に移って肖像画の注文を受ける。 その後，チリに滞在し，1853 年にリマ（Lima）に移動。その後の足跡はたどれないが，ペルーで活発に仕事をしたことはわかる。すでに 1853 年にリマで，スペインから独立させた革命家で政治家のシモン・ボリヴァル（Simon Bolivar 1783–1830）の姪のベニニャ・ボリヴァル・パラシオス（Benigna Bolivar Palacios）の肖像画（ボリヴァル生家である「解放者の生家（Casa Natal del Libertador）」蔵，カラカス）を描いている。またペルーの首都リマで，ペトロヴィチは，ペルーの独立の闘士でリマの州長官と市長となったアントニオ・グティエレス・デ・ラ・フエン

テ（Antonio Gutierrez de la Fuente 1796–1878）の娘，カロリナ（Carolina）の肖像画を描いた【図 3】。リマの歴史家（Juan Manuel Ugarte Elespuru 1911–2004）が記した 19 世紀ペルー絵画史の未出版のノートには，「パブロ・ペトロヴィチ，おそらくセルビアの画家」として，1856 年 8 月 11 日に北ペルーのリマから 700 キロの町グアダルペの素描教師となったと記されている。これは，ペトロヴィチが 1856 年 8 月 13 日付けのオーストリア領事宛の書簡に，ペルーの首都リマから離れねばならなくなるだろうと記していることと一致する。その後，史料によると，目的は不明であるが，ペトロヴィチはヴァージン島（セイント・トマス）を経て，イギリスに帰った。ロンドンに滞在したのは短期で，1856 年の 11 月にはニューヨークに居て，5 番街に住む顧客の肖像画を 2 点描いた。ウィリアム・H・ジョーンズ（William H. Jones）夫人のリディア・ジョーンズと富裕な商人リチャード・K・ヘイト（Richard K. Haight）夫人サラ・ロジャーズ・ヘイトの肖像画である。後者は最近，ニューヨークのオークションで売買されている。

この後，再びロンドンに戻ったようで，1861 年の末までロンドンに居た。なぜロンドンに長く滞在したかは不明である。1862 年の初めまでにはグアダルペに戻ったようである。1862 年 2 月 12 日付けのペルーの官報である『ペルー人（El Peruano）』によると，ロレト地方の首都モヨバンバの新しい行政機関が，ペトロヴィチを地方行政官に任命したことがわかる。モヨバンバでは政治に関わっただけではなかった。ヨーロッパと合衆国とブラジルで販売好調であったパナマ帽の販売にも関わった。モヨバンバ製のパナマ帽は質の高さで著名であった。

ペトロヴィチは遅くとも 1867 年の初めには，北ペルーを離れたと思われる。というのはその年の 3 月 30 日には，パナマの新聞によると，パナマの港町タボガ（Taboga）にファヴォリタ（Favosita）号蒸気船で到着しているからである。パナマに来たのは東海岸に行くことが目的で，1868 年の 2 月中旬にはニューヨークに居ることがわかっている。その後，彼は再婚する。オーストラリアに滞在していた時の彼のメモによると，再婚は 1870 年のことで，エリザベスと言う名の女性で，52 歳のペトロヴィチより 35 歳若い 17 歳であった。二人は 2，3 年くらいニューヨークに住んだようで，1873 年にはペトロヴィチはデンヴァー（Denver）に居る。しかしコロラド州で仕事をした記録はない。

1874 年のサンフランシスコ市の氏名録を見ると，ペトロヴィチがサンフランシスコに居ることがわかる。この 2 回目のカリフォルニア滞在でも多くの仕事をしている。同じサンフランシスコの市民で，著名な弁護士エドモンド・グールド（Edmond Goold），サンフランシスコのラビであるエルカン・コーエン（Elkan Cohn）博士。唯一ラテン系のカリフォ

ルニア知事ラムアルド・パチェコ（Ramualdo Pacheco），商人モリス・ワーカイム（Morris Wurkheim），フランスからの喜劇オペラ歌手マリー・エメ・トロンション（Marie Aimee Tronchon）の肖像画を描いている。1875 年にペトロヴィチはサンフランシスコ美術協会の第 7 回展に出品し，また 1875 年の秋に，女性の肖像画が，サンチアゴで開催されたチリの国際展覧会で受賞したとの記録がある。

この盛んな制作活動は，サンフランシスコと共にカリフォルニアの興隆の町ロサンジェルスでも続いた。早くも 1875 年 1 月すえにピコハウス（Pico House）の彼のアトリエで「優雅な肖像画群」を展示した。彼自身の若い妻の肖像画も，地方の新聞で記事になっている。ピコハウスとは，アルタ・カリフォリニア（Alta California）の最後のメキシコ人支配者ピオ・ピコ（Pio Pico）が所有する，ロサンジェルスの中央広場にある 3 階建ての建物で，最初の大陸横断鉄道が完成した 1869 年に設立された。ピオ・ピコは政府が変わった時にアメリカの市民権を得て，商売に転じ，カリフォルニア最大の地主の一人となった。彼の弟の大将アンドレス・ピコも 1851 年にカリフォルニア州議会のロサンジェルス代表に指名され，政治的活動で成功し，1876 年 2 月 14 日に亡くなっている。ペトロヴィチは，この二人の肖像画を描いている。アンドレスの肖像画は，アンドレスの死後にダゲレオタイプの写真をもとに描かれており，現在，カリフォルニア州の自然史博物館に所蔵されている。兄のピオ・ピコの肖像画は，ピコと画家の間での裁判を引き起こした。1876 年 6 月 27 日にペトロヴィチが，ピオ・ピコの肖像画を腕の限りに制作したのに，ピオ・ピコは注文していない，その絵は画家が自分のために描いたとして支払わないと 650 ドルの賠償を訴えた。絵が 500 ドル，額と画材が 150 ドルと言う計算である。この訴訟で，ペトロヴィチはピコハウスでのアトリエを失ったようである。訴訟の結果は不明であるが，これが原因で，ペトロヴィチはロサンジェルスを去ることになったのであろう。他にもロサンジェルスでは，ロサンジェルス市長のプリューダン・ビュードライ（Prudent Beaudry 1819–93）や農場主で銀行家でフリーメーソンで，銀行の破産のために 1876 年 5 月 17 日に自殺したウィリアム・ウォークマン（William Workman 1799–1876）の肖像画，またその娘アントニアの息子であるトマス・ウォークマン・テンプル 1 世の肖像画を同年に描いている。1876 年 12 月，ペトロヴィチは再び，南アメリカ，おそらく一年過ごしたことのあるチリを目指して出立した。しかし 1878 年 1 月には再び合衆国，今回はネヴァダのヴァージニア・シティに居た。この発展の著しい町でのペトロヴィチの滞在は，マーク・トウェインが寄稿していたことで著名な地方紙『地方起業（Territorial Enterprise）』の三つの記事からわかる。最初の記事は，1878 年 1 月 9 日付で，アーリントン・ハウス（Arlington House）での

ペトロヴィチのアトリエで展示された作品についての記事で，中に『シエスタ』と名付けられた絵があり，男の子が，床で寝ている大きな犬に寄りかかって眠っているところを描いている。他の絵は未完成の肖像画で，画家の妻エリザベートの肖像画や，ヴァージニア・シティの貴顕の市民の娘を描いたものであったことがわかる。さらに 1878 年 2 月 26 日の記事では，前述したチリの国際展覧会で受賞した女性の肖像画についてで，第 3 の記事は 1878 年 3 月 31 日付けの記事で，1846 年の後半にラホールにいた時に，世界で最大のダイヤモンドであるコフ・イ・ノール（Koh-i-Noor）の発見にペトロヴィチが貢献したことについての記事である。

ペトロヴィチはヴァージニア・シティに止まることなく，『ロサンジェルス日報（Los Angeles Daily Herald）』によると，1878 年の 4 月には再びサンフランシスコに居て，ロサンジェルスに戻る予定であると言う。しかしこれは失敗したようで，彼はカリフォルニアを出て，ポートランド，オレゴン，そしてブリティシュ・コロンビア州の州都ヴィクトリアに移動した。1878 年の後半と 1879 年の初めをそこで過ごしたと思われる。1879 年 3 月 26 日付けの日刊紙『イギリスの植民地家（British Colonist）』によると，ペトロヴィチは多くの交友関係を作り，「著名な芸術家で肖像画家」はシティ・オブ・ボストン号でオーストラリアに向かうだろうと記している。おそらくペトロヴィチはシドニーで下船した。画家のシドニー滞在は『シドニー朝刊（Sidney Morning Herald）』に記され，1879 年 9 月 3 日付けには無記名の記事で，画家が描いたシドニーのローマカトリックの大司教ロジャー・ヴォーン（Roger Vaughan）の肖像画が詳しく紹介されている。同じ 9 月のシドニーの国際展覧会で，主催したニュー・サウス・ウェールズ州の代表 6 人の一人として 4 つの肖像画を展示した。ガーデン・パレスの第 9 室で展示された現存する 8 つの作品のうち，4 枚が風景画，2 枚が頭部習作，1 枚が静物画，残り 1 枚が象徴的テーマであった。いずれもイングランドとスコットランド出身の画家たちで，頭部習作だけがシドニー生まれの女性画家コドリントン（Miss M.H. Cordrington）の作であった。彼女はオーストラリアの女性画家として重要であるが，展覧会への出品記録はあるが，いまだ名前もイニシアルしか知られず，作品はどの美術館にも所蔵されていない。

3 ヶ月後の 1880 年 1 月 21 日，『シドニー朝刊』は「パブロ・ペトロヴィツ殿（Senor Pablo Petrovits）」について記事を書き，「画家が自分の腕前を見せる最良の作例」として持ってきた 3 点の絵について記している。前述のコーンとパチェコの肖像画，そしてペトロヴィチのインド時代からの知人である医者ヴィンセント・モハベエー博士（Dr. Vincent Mohabeer）の肖像画であった。

1880 年 4 月，ペトロヴィチは，ニューサウスウェールズのフリーメイソンの大指導者（Grand Master）であったジョン･ウィリアムズ（John Williams 1813–89）の肖像画を描いた。その 3 ヶ月後，彼はメルボルンに向かった。メルボルンでも，メルボルン市警察の長官でフリーメーソンの役員のフレデリック・スタンディッシュ（Frederick Charles Standish 1824–83）の肖像画を描いた。この交友はペトロヴィチにとって慰めになったであろう。と言うのは 1881 年の 4 月に妻のエリザベートが疑惑ある状況で亡くなっているからである。

この悲劇は，メルボルンの日刊紙『アルガス（Argus)』の 1881 年 4 月 4 日付けに「憂鬱な自殺（Melancholy Suicide)」との題で記された。その 2 ヶ月後に，同じ出来事が，ロサンジェルスの新聞に別様に記述されて記事となっている。そこでは，嫉妬深い画家が魅力ある浮気妻をオーストラリアで殺害したとの内容であった。これはペトロヴィチの敵対者，おそらくピオ・ピコによって仕組まれたものであるが，70 年後にカリフォルニアの歴史作家ヘンリー・ウィンフレッド・スプリッター（Henry Winfred Splitter）が 1959 年に執筆した記事で，それを信憑性のあるものとして記し，さらに，ペトロヴィチは殺人で死刑宣告を受けたとも記した。アメリカの記者がそれを受けて，ペトロヴィチの生涯と作品についてはあまり記さず，最後にオーストラリアで絞首刑になっただけと記したことがある[(10)]。このニュースは疑いなく誤りである。オーストラリアの死刑者の膨大な名簿に名前はないし，若い妻の死後もペトロヴィチは仕事をしている。

1881 年 7 月中旬の記録では，ペトロヴィチはメルボルンからサンフランシスコに蒸気船ゼーランディア（Zealandia）号で向かい，カリフォルニアに着いて，銀行頭取ロイド・テヴィス（Lloyd Tevis 1824–99）の肖像画を描いて，その後ニューヨークに向かい，1881 年 11 月にはマンハッタンの中心部のワシントン広場にアトリエを持ち，ハンガリー生まれのベティ・ナフタリ（Betty Naphtali）の肖像画を描いたと記されている。

そして一年も経たない 1882 年 8 月，ペトロヴィチはシンシナティにいたことがわかる。『シンシナティ探索（Cincinnati Enquirer)』の無記名の記事は，1 ヶ月前にシンシナティに来たった「パブロ・ペトロヴィチ殿（Senor Pablo Petrovic)」は，フランスとオーストラリアで名声を確立し，メルボルンとシドニーとチリで優れた賞を受賞していると紹介している。このインタヴューの時期，ペトロヴィチは，シンシナティのシナゴーグの学識あるラビであるアイザック・M ワイズ博士（Dr. Isaac M. Wise）の肖像画を制作していた。彼のアトリエの壁は，彼の制作した肖像画で埋められていて，「パブロ･ペトロヴィチ殿（Senor

(10)　Marković, op. cit., p. 90

Pablo Petrovic)」はこの数週間，シンシナティで仕事をしていて，ウィリアム・ウィスウェル（William Wiswell）や鉄道人のウェルティ（E. P. Welty）とその妻の肖像画を完成させたと記し，この最後の肖像画は「まさに芸術品で，美しい女性の美しい肖像」で，シンシナティの展覧会で展示されると記している。ペトロヴィチがどれくらいオハイオ州にいたかはわからない。1885 年春にハワイに落ち着いたことから，1882 年の秋から 1885 年の春までで，その間，太平洋群島にへの直行便はサンフランシスコからであるから，サンフランシスコに移ったと考えられよう。しかし 1883 年，1884 年，1885 年のサンフランシスコの人名録に彼の名前はない。

6. ハワイ時代

ハワイ王国の首都ホノルルへの到着は 1885 年 5 月であった。ハワイで仕事をすることになった経緯はマルコヴィチ氏も記さず，不明であるが，ハワイのカラカウア王が熱心なフリーメーソンの会員で「指導者（Master Mason)」であったことから，フリーメーソンの人脈が働いたことも予測できるだろう。

ハワイにはペトロヴィチは 1851 年に滞在していたが，今回は個人的な目的で，短い 4 ヶ月の滞在ではあったが，成果は大きく，そのことは，『太平洋商用新聞（Pacific Commercial Advertiser)』の「王立アカデミーの画家　P. ペトロヴィツ氏」という 1885 年 8 月 21 日付けの記事がよく示している[11]。その新聞社の社主はハノーヴァー出身のドイツ人クラウス・シュプレケレス（Adolph Claus J. Spreckels 1828–1908）で，砂糖売買で大儲けした当時ハワイの最大の実業家で，記事の内容からも，ペトロヴィチとはサンフランシスコからの知り合いであったと思われる。記者はペトロヴィチを，肖像画の分野では数少ない「王立アカデミー」の画家で，3 つの大陸に名声が轟いていると読者に紹介している。

ハワイでの 4 ヶ月の滞在中，カラカウア（Kalakaua 1836–91）王の肖像画を 3 枚描いた。1 枚はローマ教皇レオ 13 世（1810–1903，教皇在位 1878–1903）に贈られ[12]，もう一枚はいちばん大きい肖像画で，それは日本の明治天皇睦仁の特別使節を讃えての式典で大いに賞賛され，広く注目された肖像画である。この式典はハワイ王家の外務省が準備し，7 月 23 日に実施された。差配したのは外務大臣ワルター・ギブソン（Walter Murray Gibson 1822–

(11) "Mr. P. Petrovits, R.A.", in *Pacific Commercial Advertiser*, IV/299, 21 August, 1885, 3.

(12) ローマ教皇への肖像画送付については，Marković, op. cit., p. 95. の他に，*Ho'oulu Hawai'i : The King Kalakaua Era*, Honolulu Museum of Art, 2018, p. 99. に言及がある。*Pacific Commercial Advertiser*, 2 July, 1885, 2. を典拠としている。

88）であった[13]。この日本からの派遣団は，ハワイ政府が雇った山城丸で，日本の外務省の事務官（Secretary of the Foreign Department. しかし 1885 年 6 月から 10 月までは大蔵省の調査課長であったとも記されている[14]）井上勝之助（1861–1929）が率いて 1,000 人の移民をホノルルに運び，ハワイではカラカウア王をはじめカピオラニ女王が中心となって大歓迎された。山城丸が横浜を出立したのは 6 月 4 日で, 15 日間の航海でホノルルに到着した。またホノルルを発ったのは 7 月 28 日であった[15]。この間にカラカウア王の肖像画が手渡されたことになる。

さらに残りの一枚は最も小さい肖像画で，1885 年 8 月末に完成したというが，所在は不明で探究中である。ペトロヴィチは他に 1 枚のカピオラニ（Kapiolani 1834–99）女王の肖像画，1 枚のポオマイケラニ（Poomaikelani 1839–95）王女の肖像画を描いた。カラカウア王の肖像画が一枚【図 6】，カピオラニ女王【図 8】，ポオマイケラニ王女【図 9】の肖像画が, カラカウア王が西洋式に改築したイオラニ（Iolani）宮殿【図 4】に現存している。カラカウア王とカピオラニ女王の前者 2 点は未発表である[16]。記したように，ペトロヴィチが描いたカラカウア王の肖像画 1 点が 1885 年に明治天皇に献呈されていて，『布哇皇帝之像』との作品名で現在宮内庁三の丸尚蔵館にある【図 7】。その寸法は縦 101.0 cm，横 75.5 cm[17]。また現在イオラニ宮殿にあるカラカウア王の肖像画は，縦ほぼ 26 インチ，横 21 インチ[18] というから，縦 66 cm，横 53 cm で，かなり小さく，また銘文がキリル文字（…пови…Хонолулу <?> 1885）で記されている【図 6c】ことから完成作ではなく習作と思われる。完成作は三の丸尚蔵館本だけが所在がわかっており，他の 2 点は未発見ということになる。

イオニア宮殿に現存するカピオラニ女王の肖像画の銘文【図 8c】と，ポオマイケラニ王女の肖像画の銘文【図 9c】はラテン文字（P. Petrovits. R.A. Honolulu. 1885.）[19] であり，

---

[13] Reception to the Japanese commissioner. Brilliant society event at the Foreign minister's, *Pacific Commercial Advertiser*, IV/274, 24 July, 1885.　以上，Marković, op. cit., p. 95. による。

[14] 松村正義「ヨーロッパの情報収集の達人　井上勝之助　初代駐独大使」『外交』Vol. 6

[15] 以上，日本から同行したジョン・ジェイムズ・マールマンの回想による。John James Mahlmann, Reminiscences of an Ancient Mariner, in *Yokohama*, The "Japan Gazette" Printing & Publishing CO., LTD, 1918, p. 183–200.　カラカウア王の肖像画については記述はない。また日本の外交官井上勝之助の訪問の詳細については，R.S. Kuykendall, *The Hawaiian Kingdom III : 1874–1893*, University of Hawaii Press, Honolulu, 1967, pp. 117–120 にも記されている。Marković, op. cit., p. 95. による。

[16] イオラニ宮殿博物館の学芸員 Leona Hamano 氏の了承済

[17] 宮内庁三の丸尚蔵館の田中純一朗研究員による（2021 年 12 月 10 日付メール）。

[18] 額の修復を担当したホノルルの修復業者 Minnick Associate の 2019 年 6 月 26 日付 Leona Hamano 氏宛書簡による。

[19] 「R.A.」は王立アカデミー（Royal Academy）の略。マルコヴィチ氏によると，ペトロヴィチは，しばしば署名の後に R.A. と記しているという（筆者宛，2020 年 9 月 24 日メール）。ペトロヴィチのウィーンのアカデミーで学んだ矜持を示すか。

この 2 点は完成作と思われる。またそれぞれ現存する肖像写真【図 6a，8a，9a】と比較すると，ペトロヴィチならではの修正が見られることもわかる。画家が肖像画を制作する際に実際のモデルの代わりに使うことも多い肖像写真と，制作された肖像画との比較はマルコヴィチ氏も，彼の執筆段階で判明していたポオマイケラニ王女の肖像画について行っている[20]。

ハワイ滞在中には，他にも前述の外務大臣ワルター・ギブソン，ニューヨーク出身の宮廷顧問で野球ゲームルールの発案者として名高いアレクサンダー・カートライト（Alexander J. Cartwright 1820–92）の肖像画を描いた。カラカウアとカピオラニは 1863 年に結婚し，その 10 年後にカラカウアは王位に付いた。二人に子供はなく，カピオラニの妹ヴィクトリアの息子たちを養子とした。ポオマイケラニ王女もカピオラニの妹で，宮廷で重要な役割があった。

イオラニ宮殿は，ハワイの王家の公式の住居で，カラカウア王が 1879 年から 82 年にかけて，ヨーロッパの宮殿を模倣して改修した。ハワイにおけるペトロヴィチの肖像画制作は高く評価されたようで，1885 年 8 月 27 日には王から受勲され，その数日後には「王家付きの画家（Artist in King's Household）」と記されている。首都の新聞『太平洋商用新聞（Pacific Commercial Advertiser）』では「当局発表（By Authority）」として公式の職名が記されている。王家の宮廷画家としてのペトロヴィチについてだけでなく，『太平洋商用新聞』は，ペトロヴィチがオーストラリア経由でカルカッタに向けて出発したと記している。

ペトロヴィチがインドに向かったのはカラカウア王の依頼による世界の貴顕の肖像画制作のためであった。カラカウア王はインドの副王であるダフェリン（Dufferin）卿とその夫人の肖像画の他，ジョホール（Johor）のスルタン・アブ・バカル（Sultan Abu Bakar 1833–95），シャムのラーマ（Rama）5 世王チュラロンコン（1868–1910），エジプトのカディーブ（Khedive：総督）のタウフィーク・パシャ（Tewfik Pasha 1852–92），そしてイタリアのウンベルト王とマルガリータ女王の肖像画を依頼した。それはイオラニ宮殿の壁に飾るためであった。ペトロヴィチはこの仕事を，1886 年 1 月から 1887 年 1 月までの一年で完成した。しかしそのあと，1887 年 6 月 13 日に体調を崩して，ローマで亡くなった。彼の死は，ローマのハワイ王国公使ジェイムズ・フーカー（James K. Hooker）から，ハワイとアメリカの人々に伝えられた。フーカーはペトロヴィチが，ローマのカトリック墓地に埋葬されるよう手配した。

1888 年 7 月のハワイの新聞には，7 月 18 日にホノルルのハワイ諸島最高裁判所で実施

[20] Markovic, op.cit., p. 96

された遺言検認の過程が記されている。前述のアレクサンダー・カートライトとその息子二人の証言の後，外務省を通じて入手した記録が読み上げられた。遺言者（testator）は，ペトロヴィチが 1887 年 6 月 14 日にローマで死去したことを伝え，オルバ（Olba）の司教ヘルマン・ケッケマン（Herman Koeckemann）が遺言を実施する代理人となった。ペトロヴィチは，1 万ドルに値するカリフォルニアの土地と，ハワイに残っている 300 ドルに値する何枚かの絵画を含んで，彼の全ての財産をホノルルのカトリック教会に遺贈した。

7.　研究の位置付けと展望

ミオドラグ・マルコヴィチ氏は，その著書を次の引用で結んでいる。ペトロヴィチが 1850 年 9 月 28 日付けで香港からティミショアラに送ったノートで，そこにはこうある。

「神において，私が言ったように，中国ではセルビアの兄弟はとても少ない。しかし私の足がこの遠い世界に立つことを運命が決めたのであれば，私は多分あなたたちの注意に値するだろう。ただ私の愛しいセルビアの兄弟たちが育って，私を誇りに思ってくれればいいが…（Ta za Boga, kao sto rekoh, vrlo je malo srbskih sinoba u Hini bilo, pa kad je sudbina tako zakljucila, da moja noga u ovaj udaljeni svet stupi, to valjda sam zasluzio vnimanija Vaseg. Trebalo bi, da se moja mila brča Srblji diče i ponose sa mnom....）。」[21]

マルコヴィチ氏は画家パーヴェル・ペトロヴィチのセルビアとのつながりを強調し，数奇な人生を歩んだセルビア人画家をセルビア美術史の中で位置付けることを目的としている[22]。

しかし我々の視点は別である。まず作品が手元にある。明治天皇に献呈されたカラカウア王の肖像画がある。それがセルビア人画家の手になって，そのセルビア人画家はウィーンのビーダーマイヤーの肖像画を学んで，帰郷してセルビアでは正教徒として神の肖像画であるイコンを描き，その後ルーマニアの宮廷人から，新大陸に渡って，アメリカの貴顕とチリの宮廷人，そしてハワイの宮廷人，最後にカラカウア王の依頼で，ローマ教皇の肖像画を描くために滞在したローマで客死する。そこにはカラカウア王にも繋がるフリーメーソンの人脈もあり，アメリカの超越主義とキリスト教との関係もあるに違いない。やはり西を目指し，西部のインディアンの習俗を描き，1884 年末にハワイに至って，ハワ

---

[21] Marković, op.cit., p. 104.

[22] マルコヴィチ氏によるモノグラフは，ハワイでの現地調査を実施する前に，6 ヶ月間のインターネットによる情報収集と研究者間の連絡だけで 160 ページに及んで執筆された。2019 年 9 月の筆者との調査を踏まえて，マルコヴィチ氏は更にパーヴェル・ペトロヴィチ研究を進めている。

イのキラウエア火山活動など崇高な風景画を描き，4 年後にホノルルで亡くなったフランス人画家ジュール・タヴェルニエ（Jules Tavernier 1844–89）[23]，また 1886 年の日本滞在の後，1890 年にゴーギャンより一足早くタヒチに至った不可知論者ジョン・ラファージ（John La Farge 1835–1910）[24] の画業も含めて今後も考察を進めていくに値する画家である。

[23] タヴェルニエの西部の主題については，*Jules Tavernier and the Elem Pomo*, Metropolitan Museum of Art, 2021．タヴェルニエについてのモノグラフは，Scott A. Shields/Alfred C. Harrison Jr./Claudine Chalmers, *Jules Tavernier : Artist and Adventurer*, Portland, 2014．タヴェルニエとモントレーの美術コロニーについては，Scott A. Shields, *Artists at Continent's End : The Monterey Penisula Ar Colony, 1875–1907*, Crocker Art Museum, 1906.

[24] ジョン・ラファージについては，東北学院のラーハウザー記念礼拝堂の 1932 年イギリスのヒートン・バトラー & バイン工房制作の「昇天」ステンドグラスを契機に，アメリカのステンドグラス制作さらに同じく中世主義によってジャポニスムのパイオニアとして注目し，東北学院大学で 2017 年以来連続のシンポジウムを開催している。論文は次がある。拙稿「ジョン・ラファージ：天と地をつなぐ」『東北学院大学キリスト教文化研究所紀要』第 36 号，2018 年，41–56 頁

図 1　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『エマヌエル・キウルスカの肖像』 1836 年　ベオグラード国立博物館
Marković, sl. 1

図 2　パーヴェル・ペトロヴィチ画　イコン,『洗礼者ヨハネ』（部分） 1839/40 年　聖ニコラ教会（ヤシャ・トミッチ）
Marković, sl. 7

図 3　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『カロリナ・グティエレスの肖像』 1854 年　リマ美術館　Marković, sl. 18

図 4　イオラニ宮殿　2019/9/10 撮影

図 5　ペトロヴィチ未発表作品 2 点
Miodrag Markovic 氏と Leona Hamano 氏
2019/ 9/11 撮影

図 6b　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『カラカウア王の肖像』 キャンバスに油彩
66×53 cm　1885 年　イオラニ宮殿

図 7　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『布哇皇帝之像』 キャンバスに油彩　101.0×75.5 cm
1885 年　宮内庁三の丸尚蔵館

図 6a　カラカウア王
Marković, p. 95

図 6b　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『カラカウア王の肖像』（部分） 1885 年
イオラニ宮殿

図 6c　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『カラカウア王の肖像』（銘文部分） 1885 年
イオラニ宮殿

図 8a　カピオラニ女王
Marković, p. 95

図 8b　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『カピオラニ女王の肖像』（部分） 1885 年
イオラニ宮殿

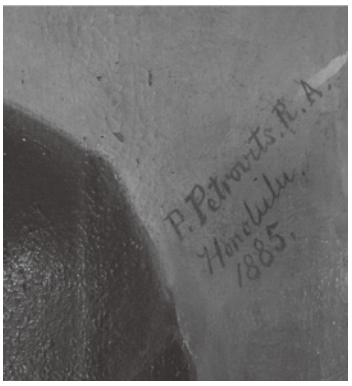

図 8c　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『カピオラニ女王の肖像』（銘文部分） 1885 年
イオラニ宮殿

図 9a　ポオマイケラニ王女
Marković, p. 96

図 9b　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『ポオマイケラニ王女の肖像』 1885 年　イオラニ宮殿　Marković, sl. 26

図 9c　パーヴェル・ペトロヴィチ画 『ポオマイケラニ王女の肖像』（銘文部分） 1885 年
イオラニ宮殿